Cure to Care

與儀　達朗

【登場人物】

町田　翼（32）：救急医

鈴木　舞（26）（30）：訪問看護師

村井　正和（50）：訪問診療所院長

五十嵐　隼人（28）：訪問診療所職員

金城　恵（36）：訪問診療所職員

山﨑　香織（44）：ケアマネ

鈴木　健（52）：外科部長

八木　直久（50）：救命センター部長

新井　医師（29）：町田の後輩の救急医

山田　医師（29）：町田の後輩の救急医

島崎　医師（30）：町田の後輩の救急医

高井　看護師（30）：救命センター看護師

救急隊員（22）：救急隊員

櫻井（95）：救急搬送患者

田中　徳次郎（85）：肺がん末期患者

田中　慶子（50）：徳次郎の長女

田中　良子（45）：徳次郎の次女

キャスター（40）：TVキャスター

訪問診療医（50）：TVのコメンテーター

居酒屋店主（50）：居酒屋の店主

森田（50）：舞の当時の受け持ち患者

医師A（26）：救命救急センター研修医

看護師A（24）：救命救急センター看護師

看護師B（23）：集中治療室看護師

医師B（26）：集中治療室研修医

外科医A（36）：外科部長鈴木の部下

外科医B（34）：外科部長鈴木の部下

【あらすじ】（第一話～最終話）

高齢化社会が加速する日本。救命救急センターで勤務する救急医の町田翼は、救急搬送されてくるがん末期患者や超高齢者の対応に追われていた。彼らは町田が勤務する病院の内科・外科のかかりつけの患者であったが、急変時の治療に関する話し合いが行われておらず、町田や同僚はストレスを抱えながら、心身は徐々にすり減っていった。ある日、外科部長の鈴木主治医の肺がん末期の患者が呼吸不全で搬送されてくる。町田は苦渋の決断で人工呼吸器を患者に装着するが、患者は翌朝亡くなってしまう。救命のために施した処置に対して、患者の長女からは厳しい言葉をかけられ、鈴木からは救急医のエゴではないかと責められる。心が折れてしまった町田は救命センター部長から休暇を勧められる。休暇中、町田の後輩が企画した飲み会で、大学のサークル仲間で訪問看護師をしている鈴木舞と出会う。町田に対して舞は、『医療が患者

の人生を決める世界が当たり前だったと思うけど、今度は彼らの人生で医療を決めてみない？』と訪問診療所の連絡先を渡す。数日後、訪問診療所の扉を叩いた町田は、村井院長の診療に同行する。舞の言葉を思い出し、患者の人生にとって最善の医療を提供するため、訪問診療の道に進むことを決意する町田。元救命士で看護師に引け目を感じている訪問診療所職員の五十嵐、訪問診療所職員の金城の生き別れた母親でガン末期の患者、本人の意志に反して延命を望む家族、診療報酬に目がくらんだ同業医師らと出会い、ケアマネ山﨑の協力も得ながら町田は成長していく。そんな中、外科部長である鈴木にステージ４の膵臓癌が見つかる。化学療法を受けながらも、自他共に病勢の進行を感じ、当初は自身の余生と向き合いきれない鈴木だったが、娘の舞や町田との交流を経て、治療コードの重要性にも気づき、在宅療養を決意する。町田は鈴木の主治医として最後を看取るのであった。

第一話　「出会い」

○前田救命救急センター・ステーション（夜）

忙しく動き回る看護師や医師達。ステーションの机に置いてある救急車受け入れの電話が鳴る。少し荒げに受話器を取る新井医師（２９）

新井「はい、前田救命センター」

救急隊員（２２）（声）「９５男性、そちらの呼吸器内科にかかりつけの患者です。呼吸苦の訴えがあります。受け入れ可能でしょうか？」

新井「ちょっと待ってください」

保留中にして周囲を見渡す新井。看護師や医師が忙しく動いている。その中で、処置を終えた町田薫（３２）が白衣を羽織りながら素早く横に現れる。

町田「受けるよ、新井。うちのかかりつけの患者だろう？」

新井「まぁそうですけど……」

やや不満そうな表情をしながら、受話

器の保留を解除し受話器を耳にあてる。

新井「受け入れます、名前と生年月日お願いします……」

○同・初療室　（夜）

新井「先輩、最近高齢者の搬送ばかりですよ」

うんざりした顔で腕を組みながらだるそうに患者を待つ新井。横で肩をポンと叩く町田。

町田「しょうがないだろ、高齢化社会だよ。患者来たぞ」

○同・初療室　（夜）

救急隊員が患者である櫻井（９５）を連れて初療室のベッドに移しかえる。看護師Ａ（２４）が素早く血圧計などを巻いて、測定を始める。高井看護師（２８）が新井と町田のほうを見る。

高井「先生、うちのかかりつけみたいだけど治療コードって決まってるの？」

T「治療コード：急変の際にどこまで治療をするかという取り決め」

即座に初療室のパソコンの前に立ち、カルテをチェックする新井。マウスを動かし何かを食い入る様に探しているがコードの記載は見当たらない。

患者に酸素マスクを取り付けている町田が新井に声をかける。

町田「どうだ？」

新井「コードの話し合いの形跡ないです……」

高井「えっ……フルコードってこと？」

T「フルコード：急変の際にありとあらゆる救命処置をすること」

一瞬静まり返る初療室。落ち着いた口調で町田が口を開く。

町田「人工呼吸器が今必要な状況ではないでしょ。幸い酸素投与で落ち着きそう。新井、CT室の手配しておいて」

一同、安堵のため息とほっとした表情を見せつつ患者移動の準備を始める。

呼吸状態が落ち着いた櫻井がそばにいた町田の右腕を掴み不安そうな表情をしながら町田を見る。

櫻井「人工呼吸器とか言ったけど、わしはそんな悪い？頼むから呼吸器だけはやめてくれ。亡くなった妻が繋がれて亡くなったのをみて辛かった……頼む」

逆に患者の掴んだ手を優しく剥がして、手を握る。

町田「すいません、不安にさせて。今はこの酸素マスクがあれば大丈夫ですから」

高井「町田先生、ＣＴ室の準備できました」

町田「そうか、ありがと。移動頼むよ」

医者Ａと看護師Ａが患者を連れていく。

町田はなんとも言えない表情で俯き、患者を握っていた自身の右手を見つめる。

○前田救命救急センター・正面入口　（朝）

当直明けで並んで歩く町田と新井。

明るい表情の新井。何やら考え事
をしているような顔をしている町田。
新井「先輩、当直終わりましたねー。ほんと
患者多かったけどみんな高齢者のちょろい
感染症ばかりで、ザ蘇生みたいなやる気の
出る症例ないんですかねー、聞いてます？」
町田「あ、ごめん聞いてなかった。来年専門
医試験か。症例集めてたな、俺も」
新井「先輩みたいなチームのエースになれる
よう頑張ります」
町田「持ち上げすぎ」
新井の背中をポンと叩く。目の前を高井
が通り過ぎる。
高井「お疲れ様でした」
新井「あ、高井さん。これから飯行きません
か？当直明けに飲み行きましょうよ、最高
っすよ。俺奢るんで」
高井「ごめん、予定ある」
新井「えー、先輩どうすか？」
町田「すまん、俺も帰るわ」

新井「まじすか、えーここんとこ先輩ノリ悪いっすよ」

新井が再度、高井を引き止めようとしている中、そそくさと帰る町田。

○町田自宅・居間（夕方）

自宅の居間で遠くを見ながら缶ビールを飲んでいる町田。

○（回想はじめ）救命センター部長室（昼）

部屋の扉の前には部長室の札がある。

八木「どうした町田、話あるって？」

町田「センター長、うちのかかりつけの救急搬送患者……。がんの末期や超高齢者でも治療コードの話がされてなくて、蘇生側のこっちもストレスが掛かってるんです……」

八木「昔から言ってるんだけどね、改善ないんだよな」

町田「かかりつけの主治医が話あっておくべき問題ですよね……」

八木「町田の言う通りだよ。救命側の意見と

して引き続き投げかけてみるよ」

ちょっとの沈黙が流れる。

八木「そういえば町田、専門医取って数年なるけど、この後進みたい道とかあるのか？」

町田「正直まだ次のステップはまだ決まってないです、失礼します」

（回想終わり）

○町田自宅・居間　（夜）

町田が飲み干したビール缶を机に置く。やや力が入ったのか、缶の底と机が音を立てる。横には空の数缶のビール缶が散らばっている。

○前田救命救急センター・ステーション（夜）

ナースステーションに集まっている医師A、看護師A、新井、高井の4人。電子カルテを前に何やら不安げな表情の四人。そこに町田が歩いてやってくる。

町田「どうした？」

新井「さっき受け入れ要請があって、８５歳男性の患者なんですけど。酸素投与では保てなさそうな呼吸状態なんです」

高井「この患者さん、外科部長の鈴木先生の患者で、ステージ４の肺がん末期なんですけど、治療コードの話し合いがされてなさそうで……」

町田が救急隊からの情報が書かれたボードの用紙を見る。

町田「新井、ハイフローと挿管の準備頼む。高井さん、レントゲンとＣＴいつでも取れる様に手配お願いします」

新井「肺ガン末期の患者を人工呼吸器に繋げるんですか？」

町田「まだわからん、治療方針は家族と話すよ」

○同・初療室　（夜）

救急隊が田中徳次郎（８５）を運んで

くる。初療室のベッドに移される田中。かなりの頻呼吸で顔にはびっしょり汗をかいており、苦しくて会話ができない様子だ。看護師Ａが急いで血圧測定や酸素飽和度の測定を行う。

高井「先生、リザーバー１５Ｌで酸素飽和度８０％しかないです」

新井「ハイフロー装着しましょう」

町田「家族は？」

高井「次女さんが来てます」

○同・面談室　（夜）

町田と田中の次女である田中良子（４５）が机を挟んで向かい合って座っている。良子の顔は引きつっている。

町田「救急医の町田といいます、はじめまして」

良子「徳次郎の次女の良子です。先生、父はどうなんですか、助かるんですか？」

町田「いま懸命に治療してます。何かお父様

の体のことで聞いてますか？」

良子「長女がよく病院に連れてっているんですけど、肺がんで全身に転移しているって……。でも主治医の先生からはこ最近は安定しているって……」

町田「お父様はおっしゃる通り肺がんで全身にもガンが転移してます。一見安定していそうでもぎりぎりの状態で生活されていたかもしれません。」

町田「このような形で急に具合が悪くなった際の治療について話し合ったことはありますか？たとえば人工呼吸器の話とか？」

良子「長女からはなにも聞いてません……」

町田「長女様はいまどちらに？」

良子「出張中でさっき連絡したら朝一で戻ってくるって」

町田「少し長女様と連絡取ってみていいですか？電話番号教えてください」

良子「はい、こちらです」

町田はスマホの画面に表示された長女

の電話番号をみて、院内ピッチから電話をかけるが応答しない。町田の表情が曇る。

面談室のドアが開き、現れた新井。

新井「町田先生、ちょっと……」

町田「すいません、一旦失礼します」

軽く良子に頭を下げ面談室を出る町田。そのまま面談室のドアを閉めて新井の顔をみる。

町田「どうした？」

新井「ハイフローでも呼吸不全が進行してます。このままだともたないですよ。救命のためには人工呼吸のサポートが必要だと思います、でも……」

町田「……ちょっと待っててくれ」

再度面談室のドアを開け、中に入る町田。軽く息を吸う。

町田「良子さん、落ち着いて聞いてください。お父様の呼吸状態はいまかなり悪くて命が危険な状態です。救命のためには人工呼吸

器のサポートが必要な状況です」

町田「ただお父様の肺や全身状態からは一度人工呼吸器を装着してしまうと、残りの人生お口から管を入れられたまま一生を終えてしまう可能性が高い。そのような人生の結末をお父様は望むと思いますか？」

良子は涙ぐんでいる。

良子「そんなの……いきなり言われてもわかんないです。お父さん助けてください、先生」

町田「お父様の今後のお姿を考えると人工呼吸はおすすめできません。呼吸苦を緩和する治療も――」

俯き気味だった良子がパッと顔をあげ鋭い表情で町田の言葉を遮る。

良子「先生は父を見捨てるのですか？」

町田「そうは言ってません」

良子「だったら助けてください、先生は救急医なんでしょ、お願いしますよ！」

町田に向かって泣きながら頭を何回も

下げる良子。なんとも言えない表情で面談室の壁をみている町田。

○同・初療室　（夜）

軽く俯きながら足取り重く入ってくる町田。

新井「先輩？」

町田「新井……人工呼吸器につなげる」

一同驚いた表情で町田をみる。数秒間の沈黙が流れる。

高井「患者さん末期ガンでカルテにも余命数ヶ月って！」

町田「知ってる……」

新井「いわゆる延命処置ってことですか、先輩？」

町田「家族と話し合って救命を優先することになった、フルコードだ」

○同・集中治療室（朝）

人工呼吸器に繋がれた徳次郎。首や

手には点滴の管がつながっている。
高井がモニターをチェックしている。
酸素飽和度のアラームが鳴る。突如モニターの心拍数が徐々に落ちていく。
気づいた高井が慌てて徳次郎の首に手を触れる。脈が触れない。
高井「ドクターコールお願い、心停止よ！」
高井が患者の心臓マッサージを始める。
医師B（26）、看護師B（23）、が駆けつける。看護師Bが高井と心臓マッサージを変わる。変わった直後に、新井と町田が勢いよく入ってくる。
町田「どうした？」
高井「1分前に心停止した」
新井「初期波形は？」
高井「PEAよ」
町田「わかった。俺は気道側に回って指揮を取る。新井、原因検索を頼む。高井さんアドレナリン1Aivして」

懸命に蘇生が続けられている。看護師Bと医師Bが心臓マッサージを交代して続けている。壁の時計の針が十分経過する。

町田「新井どうだ？」

新井「採血では原因特定できなさそうです。ただ直前に酸素飽和度が下がるイベントがあって……これ見てください」

新井が患者の胸にエコーをあてて心臓を描出する。町田の顔がこわばる。

町田「・・・肺塞栓？」

新井「心停止原因だとしたら」

町田「厳しいな……」

顔を見合わせる町田、新井。高井がカーテンを開けて入ってくる。

高井「家族来てるわ」

町田「入れてくれ……」

高井に案内されて入ってくる長女の慶子（５０）と次女の良子が入ってくる。

彼女らの目の前には複数の管に繋がれ

た徳次郎、懸命に心臓マッサージを行っている医療従事者の光景が広がっている。町田がゆっくりと近づく。

町田「懸命な蘇生処置をしてますがーー」

慶子「もうやめてください！」

悲痛な叫びが蘇生メンバーの手を止める。彼らは驚いた表情で慶子を凝視している。

慶子「どうして父はこんな姿になっているんですか？先生どうしてこんな苦しい思いをさせてるんですか？」

良子「先生は命を助けてーー」

感情的になっている慶子に良子の声は聞こえていない。

慶子「命を救うため？こんなに管に繋がれて父が最後を迎えるなんて……もういいです」

慶子は足早に父親のベッドの横にそそくさと駆け寄り膝から崩れ落ちて泣いている。呆然と立ち尽くしている町田。

新井がおそるおそる声をかける。

新井「先輩？」

町田は、ベッドの横にいる長女と次女らに軽く頭を下げ、カーテンを開けて病室から無言で出る。

○集中治療室　医師控室（朝）

椅子に腰掛け、下をむいて座っている町田。目の前に、紙コップに入っているコーヒーが置かれる。顔を上げる町田。机の上に座っている新井。

町田「ありがとう」

新井「先輩、全然悪くないですよ。後からあいう言い方するなんて家族も卑怯ですよ。そもそもあんなギリギリで生きていた患者に治療コードを詰めない外科が――」

町田「新井」

新井の言葉を目で制する町田。町田の視線の先には、黒いスクラブの上から白衣を着ている外科部長の鈴木健（52）が立っている。緑の手術着姿の外

科医A（３６）とB（３４）も部長の
後ろに立っている。
町田「鈴木先生」
鈴木「町田先生、僕の患者が世話になったみたいだね。結果は残念だったけど、懸命に蘇生してくれたとか。」
軽く会釈する町田。
町田「力及ばず申し訳ないです。患者の引き継ぎがあるので失礼します、新井」
新井に目で合図して、新井と共に控室から出ようとする町田。
鈴木「長女さんに会ったよ。次女と話して人工呼吸器をつけたんだって？私も驚いたけどね。まさか救急医の先生のエゴではないよね？」
町田の右手が震え、握っていた紙コップがグシャグシャに潰れる。目の奥に怒りを灯しながら鈴木の目を見る町田。
町田「お言葉ですが……先生たち主治医が彼のような患者の治療コードを事前にお話に

なっていないから、今回のような問題が生じるのではないんですか？」

新井「先輩……」

新井が町田の左手を掴むが、町田は振り払う。黙って聞いている鈴木。

町田「僕ら救急医は先生たちの尻拭いではありません。失礼します。」

出ていく町田。外科医らに軽く会釈して町田の後ろを追う新井。

○救命センター部長室（昼）

八木救命センター部長がデスクの前の椅子に座っている。目の前に立っている町田。

八木「外科となんかあったって？鈴木部長には、小言言われたけど、フォローしといたよ。」

町田「……ありがとうございます」

腑に落ちない町田の表情をみる八木。

八木「町田、そういえば冬季休暇とってな

いだろ？まだ申請ないのがうちの部でお前だけなんだ。」

椅子から立ち上がり窓の方に目をやる八木。

八木「一週間ほど休みなんていうのはどうだ？」

町田「俺は大丈夫です、働きます」

八木「そういうと思った。」

苦笑いを浮かべる八木。

八木「明日から院外に出ていた新井の同期も何人か帰ってくるし。お前の穴は大きいけど、みんなでカバーする」

八木「休みを取らせるのも俺の仕事よ」

片合掌で町田を見る八木。

町田「……」

○町田自宅・外観（朝）

アパートの前。静寂の中で小鳥のさえずりが響いている。

○町田自宅・居間　（昼）

買い込んだ缶ビールやスナック菓子が袋いっぱい居間の机に置かれている。数個の空き缶が机の上に散らばっている。床に座っている町田が、新しい缶ビールのプルタブを開ける。

○前田救命救急センター・ステーション（昼）

新井がステーションの机の前に座ってパソコンを操作している。右横の椅子に腰掛ける山田医師（２９）。新井の肩を叩く山田。

山田「久しぶり、新井」

新井「お、山田じゃん、院外研修どうだった？」

山田「うちと違って迷わず蘇生みたいな救急患者が多かったからな。勉強になったよ」

新井「うらやましいなぁ。」

山田「確かにうちは、ギリギリの患者で治療方向性が決まってなくて、受ける俺らも本

当大変だよな。」

新井「わかる？」

勤務予定表が貼られているボードをみている島崎医師（３０）。勤務予定表の中で誰かを探しているが、見つからない様子。

島崎「ねえ、町田先生は？　シフト表に名前がないんだけど」

山田「そいえば、たしかに！」

パソコンのキーボードを打つ新井の手が一瞬止まる。

新井「一週間休暇だって」

島崎「え、あの仕事大好き町田先生が？」

新井「部長に聞いたら、有給溜まりすぎて管理職が怒られるから、しぶしぶ取らせたって」

山田「このタイミングで？」

新井「俺、ちょっと休憩行ってくるから」

席を立ち、そそくさと去ろうとする新井。顔を見合わせる山田と島崎。

○同・医師控室（昼）

三人が紙コップのコーヒーを片手にソファーに座っている。

山田「……そんなことがあったんだ」

新井「まぁ休暇と関係あるかは知らんけど」

島崎「まぁ町田先生は私たち後輩思いでいつも、初対面の患者でストレスかかるような面談も数多く自分でやってたからね」

新井が頭を掻きむしる。

新井「でもそれは、本来は町田さんがやらなくてもいい話し合いだったはず……」

山田「僕らの前では、ほんと頼りがいがあって目標の救急医の先輩だったけど、色々溜まっていたのかな……」

医師控室のの電話が鳴る。島崎が受話器をとる。

島崎「患者くるって」

山田「新井、いこう」

新井「おう」

二人が控室を出ていく。ふと何かを思ったのか、立ち止まり、ポケットからスマホを取り出し、誰かにメッセージを送っている新井。

○町田自宅・居間　（夕方）

自宅でベッドの上で横になりながらスマホをいじりながら、画面を見ている町田。そこにラインの着信音と共に、画面の上部に新井からのメッセージが表示される。

新井（声）「先輩、お疲れ様です。山田と島崎も久々に帰ってきたんで、飲み会しましょう。先輩の可愛い後輩達ですよ！明日、十九時、空けておいてください！」

文面を見て鼻で笑う町田。

町田「新井……」

町田がスマホで返信を返す。

○町田自宅・居間（夕方）

着替えている町田。クローゼットの扉を開けると、扉が隣の棚にあたる。衝撃で棚から一枚の色紙が落ちてくる。ふと落ちてきた色紙に目をやるが、大学サークル時代のものだとわかると、気を止めず、すぐに棚に直す。

つけっぱなしだったＴＶから流れてくる音声に気づき、思わず画面を見る町田。

○テレビ局　スタジオ（昼）

キャスター（４０）と訪問診療医（５０）が話をしている。

キャスター「２０２５年の団塊の世代もはじめ、日本の高齢化社会が加速していますがこの先の日本の医療の行末を、訪問診療医の先生はどう考えていますか？」

訪問診療医「病院やクリニックの需要・供給バランスも考慮すると、医療難民が増え、

医療の場が自宅や施設になる患者さんが多くなるかもしれませんねーー」

T「医療難民：適切なタイミングで医療を受けることが難しい状態にある人」

○町田自宅・居間（夕方）

町田がテレビのリモコンをとってTVの電源を消す。

○居酒屋・玄関（夜）

町田がドアをあける

○同・団体席（夜）

盛り上がっている室内に入るため、暖簾をくぐる町田。中では10名弱の医師や看護師が盛り上がっている。

新井「先輩、おそいっすよー」

島崎「先輩、可愛い後輩からのお酒です」

ビールの生ジョッキを渡される町田。

町田「元気だな、相変わらず。山田は？」

島崎「下戸なんで今日は当直やるって言ってましたー」

新井「休暇中の偉大な町田先生に乾杯！」

一同乾杯の声をあげる。

少し場の雰囲気に戸惑いながらも、

ビールを一気に飲み干す町田。

○同・カウンター席（夜）

町田が一人カウンターに座っている。

目の前に焼酎の瓶が置いてある。

一人、粛々と焼酎の水割りを飲む町田。

○同・団体席（夜）

酔った新井が高井に絡んでいる。

それを横目に見ている島崎。

新井「高井さん、ほんときれいですよね。いやー彼氏とかいないんですか？」

高井「いません」

淡々とお酒を飲んでいる高井。

新井「えー、僕と付き合ってくださいよぉ」

軽くボディタッチを図ろうとする新井。
新井の手を、島崎が叩く。
島崎「新井、あんた今の時代、三回は訴えられてるから！」
新井の顔を指さす島崎。
新井「なんだよ、厳しい世の中だな」
面白くなさそうな表情で席を立つ新井。

○同・カウンター席（夜）
新井がカウンターに座っている町田を見つけ、町田の左隣に座る。
新井「せんぱーい、お疲れ様っす。相変わらず酒強いっすね。今日は飲みましょ。」
酔って呂律が回っていない新井。
町田「酔ってるの？」
新井「全然、酔ってないです。俺の先輩いなくて寂しいです。戻ってきてくださいねー」
町田に抱きつこうとする町田の右隣に、新井の頭を叩きながら、颯爽ときて座る島崎。

島崎「先輩目標にしている後輩は多いんですからね。戻ってきてまた一緒に働いて、色々と教えて欲しいです」

町田「ありがとう」

彼らの言葉を受けて表情が少し緩んでいる町田。団体席へ戻っていく新井と島崎。

○同・玄関（夜）

扉が開いたことを知らせる鈴の音。凛々しい女性、鈴木舞（３０）が立っている。

舞「まだやってますか？いつも通り賑やかですね」

居酒屋店主「やっとるよ、舞ちゃん久しぶりだね。」

町田の左隣のカウンターに一つ空けて座る舞。

舞「生１つ」

居酒屋店主「はいよ、お待ち」

居酒屋店主が、舞の前にビールを置く。

出されたビールを飲む舞。

舞「やっぱ久々の生ビール最高ですね。」

居酒屋店主「仕事忙しいのかい？」

舞がビールのジョッキを机の上に置く。

舞「訪問看護の仕事はね。呼びだしも結構あるから。今日は久々の休み。」

居酒屋店主「頑張ってるんやね」

訪問や看護という言葉が少しばかり気になって少し聞き耳を立てる町田。

舞「でも、患者さんの生活に深く関われるから私は好きかな。」

居酒屋店主「舞ちゃん、次も生でいい？」

舞が頷く。舞が飲んだ空のジョッキを居酒屋店主に渡そうとして誤って、右方向へ倒してしまう。ジョッキの中の氷が、町田の方向に転がっていてしまう。反応した町田は思わず、席を立ち上がる。

居酒屋店主「すいません、お客さん」

町田「俺は大丈夫です」

舞「すいません、自分も手が滑ってしまって」

思わず目があう、町田と舞。

お互いの顔を数秒見つめる。

舞「町田先生？」

町田「鈴木さん？」

舞が口を開こうとした瞬間、そこへ新井が現れ、町田に肩を組む。

新井「先輩、二次会カラオケっす。」

思わず横にいる舞を見る。

新井「めちゃくちゃ美人じゃないですか、先輩の知り合いですか？」

町田「……」

舞「大学のサークルの同期です」

新井「まじっすかぁ。最高じゃないですか。お名前は？」

舞「舞です」

新井に戸惑いはじめる舞。それを見た町田は新井の肩を掴んで引き寄せる。

町田「新井、これで会計して先に二次会いけ」

新井「りょうかーいです、先輩。舞ちゃんと

今度合コン作ってくださいね」

町田はジェスチャーや軽い挨拶を交えて、新井をはじめ、飲み会メンバーは店の外へ出ていく。

新井をはじめ、飲み会のメンバーが立ち去ったこともあり、静寂を取り戻しつつある店内。町田と舞は横並びでカウンターに座っている。

舞「町田先生、私の卒業式以来よね？」

町田「ああ、サークルの追いコンだったけ？懐かしいね」

舞「町田先生、今どこで働いてるの？」

町田「同期なんだから先生とかやめてよ」

舞「ごめん、久しぶりで」

町田「8年ぶりなら仕方ないか」

町田が自身の飲んでいるグラスを飲み干し、机に置き、一呼吸置く。

町田「前田救命センターで救急医をしている」

舞「三次の救命センターじゃん、すごいじゃん、私のお父さんもその病院で働いている。

偶然だね」

町田「え、お父さんって？」

舞「いちおう外科の部長してる」

町田「鈴木健先生？」

舞「そう」

思わず噎せる町田。

町田「あ、お父さん最近なんか言ってた？」

舞「住んでるとこ別だし、あんま連絡とってないけど。どうかした？」

○同・カウンター席（夜）

何やら町田が舞に対して話している様子。

舞「へぇ、そんなことあったんだ……」

町田「そうなんよ」

舞「気にしないで。お父さん本当に頭硬いし、私が急性期病院から訪問看護へ移るときも、相当反対していたから。」

ジョッキを机に置く。

舞の目が据わっている。

町田「そうなんだ。鈴木さんはどうして訪問看護師になろうと思ったの？」

舞「急性期病院の時、外科病棟で看護師していたの。私の受け持ちに森田さんって患者がいたの。」

舞は残っているビールを飲み干す。

舞「店長、もう一杯生もらえる？」

居酒屋店主「舞ちゃん、飲み過ぎなんじゃない？」

舞「大丈夫」

舞の前に新しい生ビールジョッキが置かれる。それを手に取る舞。

舞「森田さんは当時、ステージ４の膵臓癌で入退院を繰り返していた。化学療法も長いことやってたけど、自分の体が徐々に限界に近づいていることが分かっていたのよね。」

黙って聞いている町田。

○（回想はじめ）外科病棟（昼）

ナースコールが鳴る。かけつける当時の鈴木舞（２６）

舞「どうしました、森田さん？」

ベッド上の森田が、身をかがめてベッドの下にあるものを取ろうとしている。

森田「ほんと、舞ちゃんすまんね。」

舞「あんま無理しないでくださいね」

舞は自らかがんで、ベッド下にある１枚の写真を見つける。

舞「これですか？」

森田「そうそう」

拾った写真を森田に手渡す。一枚の写真には、若い頃のコック姿の森田と幼児（女児）が一緒に写っている。

森田「俺の一人娘なんだよ。若い頃の料理人の俺はさっぱりダメでね」

舞「森田さん、娘さんいたんだ」

森田「食えねえってかみさんが娘を実家に連れて帰ってもう１５年近くかな。文通が心の支えだった。」

舞が神妙に聞いている。

森田「かみさんの話だと、来週頭には娘が成人式かで、こっちに帰ってくるらしい。」

森田「お医者さんは、一生懸命治療してくれている。ただ、俺の体はいつどうなってもおかしくなって言われた」

森田の話を聞く舞。

森田「この先長くない事はわかってる。だったらまだ手足が動くうちに、帰ってくる娘に、せめて家で手料理くらい作ってやりたいんだよ」

写真見て軽く笑う森田。

（回想終わり）

○同・カウンター席（夜）

町田「それで森田さんはどうなったの？」

舞「森田さんの願いは結局叶わなかった。主治医の先生から、自宅療養は急変リスクがあるし、長く生きたいのなら入院続けて今の治療を続けるべきだって強く言われて

ね。」

舞「それからしばらくして森田さんは亡くなったわ」

町田「……」

舞「それから私は、患者の生活や人生をもっと大切にしたいと思ったの。だから今は訪問看護をしている」

町田「患者の人生に触れて、最善の治療を考える機会はなかったな」

舞「患者と接してきた外来主治医がちゃんと向き合うべきだと思うけどね。治療コードも自然と決まってくると思うけど」

町田「でも現実はできていない……患者の生き方を考えるって大事なことだけど難しい」

ため息をつく町田。

○居酒屋・玄関前（夜）

外に出た居酒屋店主が、玄関に掛かっている『営業中』の札を裏返し、『支度中』に変えて、店の中に戻る。

○同・カウンター席（夜）

舞「町田先生は、この先何かやりたいこと決まっているの？」

町田「部長にも言ったけど、正直まだ決まってないんだよね……」

舞「訪問診療とか興味ある？」

町田「？」

舞「色々な事情で病院の外来に通えない人の生活の場に伺って医療を提供したり、相談の窓口になったりする。彼らの生活の中で医療がサポートをするイメージかな」

町田「これからの時代、医療難民が増えるって言ってたな。でも何で俺に？」

舞「先生の今のやりきれない思いに通じると思ったの」

舞「医療が患者の人生を決める世界が当たり前だったと思うけど、今度は彼らの人生で医療を決めてみない？」

舞がカバンの中から一枚の名刺を出し

て、町田の座る机の上に置く。
名刺には、『村井訪問診療所』と書かれており、連絡先が載っている。
町田「村井訪問診療所？」
舞「医者募集中だって。一回見学行ってみてほしいな」
町田は、渡された名刺にもう一度目をやる。

○居酒屋・玄関前（夜）
玄関から扉を開けて出てくる町田と舞。目の前に止まっているタクシーの後部座席の扉が開き、乗り込む舞。扉が閉まりタクシーは去っていく。タクシーを見送る町田。

○商店街・アーケード（夜）
ひとり商店街のアーケードを歩いている町田。携帯の着信が鳴り、上着のポケットからスマホを取り出す。スマホ

の画面には新井の名前が表示されている。

町田「もしもし」

○カラオケ・団体個室（夜）

１０名ほどの医師や看護師がお酒を飲んだりして騒いでいる。マイクをもって楽しそうに歌っている島崎。カラオケボックスの扉を開けて、スマホを耳にあてながらジョッキを片手に外に出る新井。

新井「先輩、遅いっすよ。いまどこっすか？」

町田（声）「さっきの居酒屋から出たとこ」

新井「本当すっか？実はあの可愛い舞ちゃんの家にいるとか……」

ニヤけながらジョッキに入っているビールを飲む新井。

町田（声）「外科部長の娘のこと？」

思わずビールを吹き出してしまう新井。

新井「外科部長の娘？」

町田（声）「うん」

新井「まじっすか……」

一瞬、顔を落とす新井だが、すぐに顔をあげる。

新井「鈴木の娘の事はどうでもいいんすよ。先輩、早くきてくださいよ、待ってますからね」

町田「わかったから。場所送って」

○商店街・アーケード（夜）

電話を切る町田。町田はスマホの画面をみながら歩き始める。

○商店街・アーケード出口（夜）

スマホの画面を見ながらアーケードの出口を出て住宅街に入る。左から颯爽と小走りに走ってくる金城　恵（３６）と接触し、よろける金城。

町田「すいません！大丈夫ですか？」

金城「大丈夫、本当ごめんね」

体勢を立て直した金城は再度小走りで

去っていく。歩き始めた町田の靴の底に何かを感じる。靴をどけると、プラスチックのネームプレートが落ちている。拾い上げる町田。スマホのライトでプラスチックのネームプレートを照らす。ネームプレートには『村井訪問診療所　スタッフ（看護師）金城恵』と書かれている。　何かに気づいた村井が、スボンのポケットから舞に渡された名刺を出す。

○町田自宅・玄関前（朝）

玄関の鍵を開けて入る町田。

○町田自宅・居間（朝）

シャワーを浴びて着替えて今に入ってくる町田。着ていた上着やズボンのポケットをチェックして、名刺とプラスチックのネームプレートを取り出す。取り出したネームプレートと名刺を並

べて机の上に置き、居間にあるベッドで横になる町田。

○町田自宅・居間（昼）

居間に座って携帯の地図のアプリで村井訪問診所を検索する町田。

○住宅街・通り（昼）

時折スマホを見ながら歩いている町田。角を曲がり、顔を上げ、歩くスピードを徐々に緩めて立ち止まる。

目の前にプレハブが建っている。

『村井訪問診療所』と書いてある立札。

○村井訪問診療所・玄関前（昼）

玄関の前にある呼び鈴を鳴らす町田。

金城（声）「はい、村井訪問診療所です」

町田「すいません、落とし物届けにました、町田と言います」

玄関の扉が開く。町田の前に金城が立っている。

町田「すいません、昨日夜に拾ったんですけど……」

ポケットからネームプレートを見せる町田。

金城「ああ、無くなってたから探してたの。ありがとう」

舞「金城さん、頼んでいた点滴ってあと何箱だっけ？」

診療所の中で点滴類が入った段ボールを抱えて玄関に姿をみせる舞。

舞の姿に思わず目をやる町田。

舞「町田先生じゃん、来たんだ」

町田「おう……」

軽く片手を挙げながら町田は奥にいる舞に挨拶する。

金城「無くしたネームプレート、届けに来てくれたの。舞ちゃんの知り合い？」

舞「大学の時のサークル仲間で、今は前田救

命センターの救急医。」

○村井訪問診療所・応接室（昼）

ソファーに座っている町田。金城が机の上にお茶とお菓子を置く。

金城「ごめんね、こんなものしかないけど」

町田「いえいえ、お気遣いありがとうございます」

金城「救急医って忙しくて大変よね。今日は休み？」

町田「今、休暇中で……」

金城「わざわざ休暇中にごめんね」

町田「いやいや、いいんですよ」

町田が診療所の内観を見渡す。思わず、壁に飾っている村井　正和（５０）宛のいくつもの患者からの感謝の手紙が目に留まる。

金城「うちの医療は生活の場があってこそかだら、病院みたいに大掛かりな手術や処置はできないけど、意外かもしれな

いけど患者からは感謝されるのよね」

黙って聞いている町田。

点滴の入った段ボールを運んでいる舞。

舞「町田先生も、いろいろあるみたいだし、訪問診療の見学してもらったら？」

町田が舞の方に目をやる。

町田「鈴木」

舞「ごめん、つい……」

金城「院長に聞いてみるね、大歓迎だとおもうよ」

町田「せっかくの申し出で嬉しいのですが、大丈夫ですよ」

舞「いいじゃない。先生今週いっぱい休暇だけど予定ないって言ってたし」

町田「鈴木」

町田が再度舞の方を見る。

舞「あ、ごめん」

町田「僕はこれで失礼します。お茶とかご馳走様でした」

軽く会釈して玄関の扉を出ていく町田。

○町田自宅・居間（夕）

町田が居間に座ってテレビを見ている。

町田の携帯のラインの新着メッセージが表示される。鈴木舞の表示がされる。

メッセージを開封する町田。

舞（声）「町田先生、今日昼は喋りすぎたかも。ごめんね。金城さんが院長に聞いたら、明日九時から同行見学大丈夫だって』

町田M「鈴木のやつ……」

○村井訪問診療所・玄関前（朝）

玄関前に立つ町田。若干躊躇しながらも右手で呼び鈴を鳴らす。

玄関が開く。村井が立っている。

町田「はじめまして、診療見学に来た町田と申します。」

村井「院長の村井です。話は聞いてます、よろしくね、どうぞ」

町田が診療所に入り、ドアが閉まる。